858
62
取扱注意
帙入

国立国会図書館　タイトル『故実四季文章』　請求記号 858-62

ガラス使用

858-62

十返舍一九著

故實四季文章

完一冊

頭書

暈 流星 虹 雲
霞 電 雷 風
雨 梅雨 霧 雰
雹 霰 霜 露 雪

錦耕堂梓

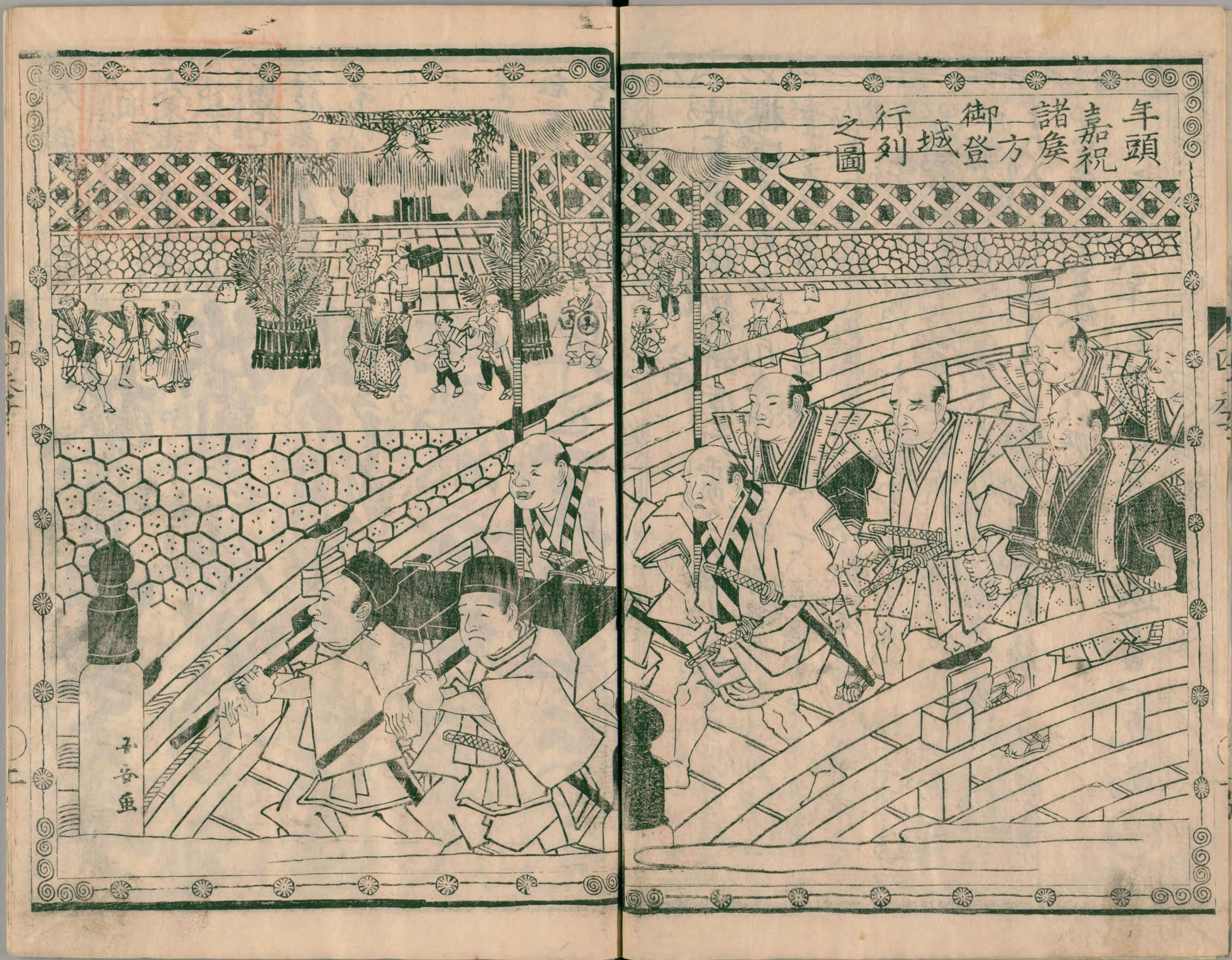
清水文庫

緒言

此書は書林錦耕堂に需めに應じ物学の児童の撰述する所なり元年中の事蹟は年生見聞次列よく見童も為に示されども其の借いとりては誤あるこも亦多くあるまじからんと甚文字義受さ若んぐ為くに元そく物はまたより近くに初くに私わるるの多めく模写すること異業乃苦心をもわれば口を閉じこの書に此に拙稿より入れく次第に熟を好むより終にその疫舎にいまり是方便乃なる所なるべや

文政八年乙酉孟春　十返舍一九誌

国立国会図書館　タイトル『故実四季文章』　請求記号 858-62
ガラス使用



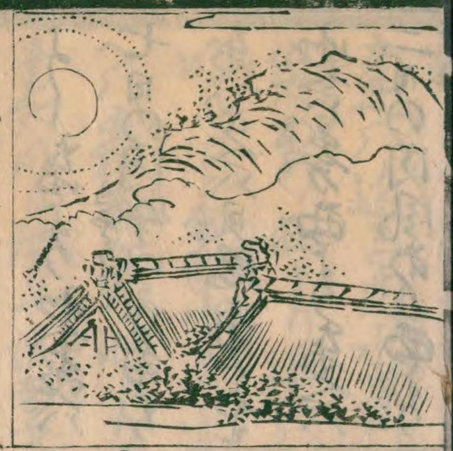
国立国会図書館　タイトル『故実四季文章』 請求記号 858-62
ガラス使用

天象之部

○日月暈

天文書云暈者星月部有日月光之逼圍也

かれこれ月の霧後上弦弓張月のうちふわり暈風雨わらんとする時を重ねて暈光射られ暈となる故暈雲氣兵雨の来るべき兆に消る



時八日和あり又月光生のうちに星をかけ雲暈星の雲ば雨なり

日に光を生ずば雨也

月光かさなりくば風

故に月の光を生ずる方より風

故實四季文章

改元之慶賀千載同

風祝納代年光榮

家家之命長極改

年を一年と名づ元

年と三歳歳有

月代月と名づ月

稱一日と元旦と

乃至正月殺

从一从元と稱也

○流星

流星ハ星のごとくして向く所をひく光星にハわゝび天火の屬なり東より西に向ひ飛ぶ時ハ昼也

東より東へ飛バ日和

東より西へ飛バ

東より少し飛バ七日の内ハ雨

東へ飛バ日照

少しハ雪西より東へ二月の内風あり西より

東へ進ム内水異

災あり西より少しハ昼風也

東より東へハ森有り

東ハ昼陰り夜雨

○虹蜺

月令雲雪の月虹たゞちにして雨

の月かくれて見ざる

日の氣ゆり垂て地

の熱氣を吸動し濃

紀ゆり西ふ見ゆる

龍の鳴こと

雞の鳴こと

日と義ゆ見

記ハ雷鳴

政麒麟出

之重明之

國家狐狸

風の光狗

雄鬼鬼

虎狼

国立国会図書館　タイトル『故実四季文章』　請求記号 858-62
ガラス使用

年に一度の八月朔日
きゝの八日和あり

○雲　地氣上りて
雲となる西京雜記に
云五色の雲を陽とし
黄色の雲を雲葉
三つ巴紋に布るの兵

悪鬼の害を除く屠蘇
國令無疫病
鳥獣水を利木数有
西隣上長老像
与江湖海内
雜煮門に松竹千
社家伝を祝飾若
永冬瑞を寿く花神
國に遺風色
安寿大国に樓春海

乳をつくる雲猫の
如くなる時は大風あり
ちぎれて消るは小風也一天
雲なくして三月に内る
○震　万宝全書に
云震青くして遠雷
明らかなれば年内水を
出さゝる震赤き者
雄くして彩雲は二月
の内大雨と牛の死る
如くなるものは皆大
風也すべて物の雲は

あやくハ雨霧はすれハ
日和はぐくべし

○電　俗語にいふ
時稲実のるかゆゑ
とかく仲秋雷鳴して
此月雨霧盛にして
陰と雪甚光くと云

正月元日赤白の餅
を以春花魂天神祭
祭国中安福幸福
庭生仏事啓蟄
皆大国樽を提て倉に始る

電雷にあれハ日和と
ゆゑにあれハ花暮て
いなびりあれハ年方
より風ふるべし

○雷　天文書に云
雷ハ陽気なり
火に属し七曜地下
上升日行天頂に奇
地を照し熱を発す
雷を雲と今紙を糊
の中に炒して
蒸け醤のあれ中に

与相傳屠蘇酒七種
粥着共に中巻に国我
胡麻延年帝に献じ
丈夫上元雪粥を盃
風祀の為天狗祭酒を

入る時八陽陰の世なり
殺ふ[illegible]詳と[illegible]陰を
陽と吸れて盛のあ
滅ど後にあるなり又
毒のごと是を沢て長
○風　風八天地の気霊
とあり風とは万物の生
ずるなり風にあ成て
長長するなり わ[illegible]
風にあるべあり暴風八
[illegible]て上る云嵐八
初秋の後始夕ゆう

吹を嵐と云暴風を
俄に起る風を疾風と
いへも是なり勢別尾
別浦別弾別[illegible]
時に暴風の起るな
あり俗に[illegible]を一日連
と云[illegible]時八樹を抜
岩を作し砂を吹つ
[illegible]れども是海の風に
して[illegible]
伊勢参度山に一日連
の初あり是風の神

服を解八清涼紙を
[illegible]
之上巳と三月三日頭
宋史皇元年此月初
曲水と[illegible]有て[illegible]紙
[illegible]
[illegible]を[illegible]酒を

飲ば治百病[illegible]頭を[illegible]紙
[illegible]を取和[illegible]麺を浮子
食する時八一切の鬼魅を
除る今[illegible]茅[illegible]
[illegible]遊八其[illegible]

畦夫松本に勝川を
氣えびしき時八風を
ふゆく人擾に偃伏
至張西戎八良呈ご
及たすぞろり劍を
被るものありを
謙閉多私といふ

不損知源氏物語枕草
紙筆之損ん然其
来更高低山田寒羅
飾綾錦湘屏風光
輝紅之鑑蓋幕上呪冬

掩呈死をいゝるものハ
なし忠に大根の汁を
つけるく金の瘡の血を
金瘡のごとしを外
極寒の凛毒あり
悍風といふハ梅雨を
ふく東風をいふ乾風
戌亥よりふく風なり
空師といふ
○雨 多謀て雲
となりて雨と成
雨と雪雑りふるを

壮観勿論之事に備更
討鳥好烏之薮里家
之間雌之或鳥戯場
神魂を奪去或者
後集遊戯甚帰を忘

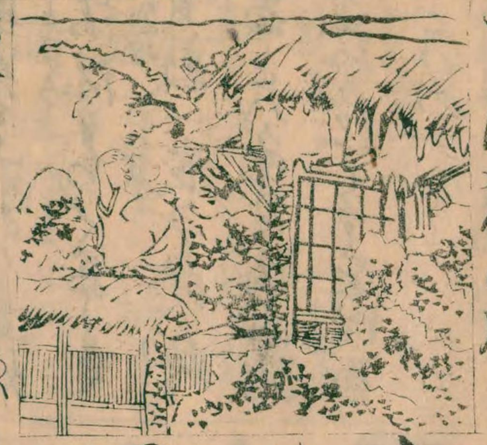
雪とつゝみの形ちなる
を雪とつゝみ
村雨八月白露の
梅雨八月時分梅
雨ぐみ落んとする
に雨雨あり色を
梅雨とつゝ大雨八
あらざれども梅雨そ
徴を生じ入梅のこと
俳金深し世俗の淚
壬の目入梅雨の淚
庚の目を出梅雨と

いへども時珍の説に八
異いなる所あり其外
法説まちまちなり
日数一定なるべ時
雨とハ名月像山陰
みいりにたるを時雨
とつゝ
○雪　雪八雨と
なり雪八雨とある
温なれば雨と雪
けるべ雪とある雪八
日天の雨陰をゆく

有夏俳諧時記に冬至
を夏一百百廿日
雨乃梅雨を
冬食とする
夏八天雑俎に春

着ものに頃蘭盆
二
例格雨雪
拾遺食物
推断八冷食を
冬至後一百三日乃

ゆき小花咲そめ
信濃賀奥羽乃北
地八雪多し　越後
其中もつとも揚き
ゆきとなる又雪の暁く



弱きものの為の涙
乃ごとくうるを凍

雪とゝる
○霰　雪のつまり
花をなぎるものゝ
俗ゝこれを米粒雪
とゝる又あゝ水をゝ
凍結したるもの
○雹　あられの大なる
ものゝ陽氣
の氣結してゝ
少し大なり雹
のゝるゝ間あり戦国
中和の地ハ稀なり

禁僧尼禅刹の花
高本樹雲雀雀
鶯鳥の音寺院
是本邦俗賞之姫と云
灌仏稚児
花も同じ咲る国
傳端午菖蒲
慶屋原故事を
繰繰去来
孫大蔵僧
種を蘭蓋

国立国会図書館　タイトル『故実四季文章』　請求記号 858-62
ガラス使用

○露　草露ぬれの
陰氣の液なり　夜
氣地につれて乃傍に
潤潔に廣為物素
玄物の持ざるの金
のごとくなるハ氣の
清きものの集のぬく
なるハ水とくを
○霜　草綱にいと
陰盛なるハ水露
凝て霜となる霜花
物を殺し露ハ物を

芙蓉湯　蓮葉墨
菖蒲酒　石榴綱
菊花草　菊酒
朝皇貴　人形幕
大方を　祝津と豪家

潔に其の性はなり
きてぶりて美之ぬく
雪霜流んとする日
雪霜流と脱に流て
後ハかるるに陰なり
八十八日
立夏の霜　五月に
降るを俗八十八夜の
金液の霜といふ草
木ともに霜に枯なる
紫蘇　蓮　樹　橘の
蔦　雪　ハて霜に

懸ぬ　風流　徐振
氷雪　天皇　學
鶯　夏　中　始
立夏　水　仕　僧
祭　奉　仕　侶

ふるぐ八十八夜ゑて
蓋を抜ゐり

○雪　雪殺二種
ともにこれ露の変ずる
ものゆえ　秋盛ゆえて
朝夕寒多し　菊
ちりをかるくと表

四季

五穀豊熟年間候白龍
赤飛蝗虫物損傷自
皆仏像等の変異集
其外物心祖食を接候
赤福合点の噂しれ安

七月七日夜を乞巧奠迎
雪半繊女天河渡揚
会事諸事書ふ仏
庭上施花瓶
人安堂柳

四季

雪よりもそげし雪ハ
枝葉を潤ゑ
義ハ根葉を潤ゑ
すものゆえ雪ハ天
より降ぐりし雲
に似たり雪山に雪
ゲ上きゑ日和里ハ
ぐるゲ上ゑ拾ゑて
ふるゆえ義ハ地
ものゆえ雲ちを烟に
似たり山の樹ゆえ
雨多し　秋冬時ゲ

陰くらくなりて地
温なるまことに雪数の
兆とする

空て風なるときは
雨ふることあり事

○正月初十日年の時
三刻風吹たるなり
風なる時は雨ふる
○二月初十三十四十
七の間の時後三刻
○三月初三十七日午
の時後

繁文金玉吟詩歌一
僧遊亭雅遊亭
竹葉亭三星園繁昌記
諸国名所案内
なにはの枝編り乗物可

○四月初七十九辰の時
○六月十六十九卯辰の時
○七月初九十又二十七
○八月初二初八十七
十九
○十月十又十七十八
二十七
○十二月初三初又初六
初八廿二廿六晦日天
地神天奥の上る辰
時○以上の月風わり
若風なる時は雨ふり

書進海内名所
期名所真楷言
江戸十返舎一九編 筆
著晋米齋玉粒

文政八年乙酉孟春
江戸馬喰町二丁目
地本問屋 錦耕堂 山口屋藤兵衛板

国立国会図書館　タイトル『故実四季文章』　請求記号 858-62　ガラス使用

858
62

国立国会図書館　タイトル『故実四季文章』　請求記号 858-62

ガラス使用